

「新日向市駅開業にあたって篠原 修教授からの祝辞」

2006.12.17(日) 「新日向市駅開業式典」にて

皆さんおはようございます。

只今、紹介いただきましたように、平成10年からよく通いました。

都市計画の佐々木政雄、建築の内藤廣、都市設計の小野寺康、この方々とともにほぼ丸8年間通いました。通いつつですね、この駅をどうしようか、この駅前広場をどうしようか、この街をどうしようか等、いろいろ考えました。



至った結論はですね、明治維新以来の駅のイメージを覆したいと思いました。

まあ、ちょっと古い話なんですけどね、明治維新以来の駅ってのはどういうものか、ちょっと振り返ってみますと、ヨーロッパ、アメリカから近代文明が船で来ました。それは横浜に着きます。横浜に着きますと明治5年には新橋、横浜間の鉄道が開通しておりましたから、横浜から文明が汽車に乗って新橋駅に来る。それで、日本を近代化しよう。

やや、時代が下って大正3年になりますと東京駅が開業します。これは東京の駅ではございますけど、日本全体でいいますと、日本の中心の駅です。東京駅から文明が汽車に乗って、日本全国、地方都市に行く。

その結果がどうなったかということ、それでずーっとやってきたわけですから、その結果がどうなったかということ、今や日本の都市はどこを見てもミニ東京。九州で言いますと、どこの都市を見てもミニ博多になりました。

地方に元気がない、つまりその発想を逆転させてですね、駅が文明の取り入れ口かということ、そうではなくて、駅ってのは、地域の文化を発信する場所としたい。そういう思いでやってまいりました。で、何をするか。何がこの日向、耳川流域の文化なんだといろいろ考えました。

至った結論は簡単でございます。昔からこの地域を育ててくれた山を中心に、木を使って、それで駅の、ホームに立ちますとわかると思いますが、覆っている屋根の木、広場にでている庇の木、それからやや細かい部分になります、照明灯にも木を使っている、車止めにも木を使っている、ベンチにも木がある。この木の文化を日本全国に、もう少し大げさに言いますと、日本は3分の2が山ですから、世界にこの木の良さを発信しようというつもりでやってまいりました。そういう目で見て頂きたいと思います。

それから2番目はですね、もう1つ考えまして、私の尊敬する大谷幸夫先生という建築家があります。その人の言葉をちょっと紹介いたします。

「篠原君ね、街とか都市っていうのは何のためにあるのか知ってる?それは、経済とかで

すね、政治とかいろいろありますけども、それだけじゃなくて、街、都市って言うのは、君ね、人間を守るためにあるんだよ。」

そういう思いでも造ってまいりました。そこは私も、大事に思っています。

今日は、幸いにして天気がいいですけども、雨も降ります、夏が来ると暑いです。ですから、駅と駅前広場はですね、市民を守る場所にしたいという思いでもやってまいりました。

昨日ちょっと、川口先生に確かめました、

「川口先生、この駅は台風が来て、風速何十メートルまで耐えられるようになってますか？」

「いや、それは、篠原くんね、風速65mまでは大丈夫だ。」

こんな事いうと、ちょっとまずいですけど、皆さんの家が、洪水であるいは台風で危なくなったら、駅に逃げるんです。高架下に来る。ここは絶対安全に造ってあります。そういう思いでもやってまいりました。

最後にですね、今日はJRの社長さんも来られてますけど、この駅は誰のもの、皆さんで考えて欲しい。

まあ、普通に言うところの駅はJR九州のものということですけども、実は私もずーっと通ってまいりましたから、ちょっと不遜な言い方ですけど、「この駅は僕の駅」僕のものだと思ってます。多分、一緒にやってきた内藤廣もそう思っているんです。

「この駅は僕の駅だ」市長さんもそう思ってくれないと困る。これは市長の駅だ。

いや、そういうとですね、これみんな、市民の駅。なんです。だからみんながこれはJRの駅だというふうに思わないで、「これは僕の駅」。

だからそういう思いで、生まれたばかりの子供を育てて欲しい。私ももうそろそろ歳ですけど、3年後に、もう一回来てみます。5年後にまた来ます。10年後にも来られたら来ます。すくすくと育て、日向市民を守る、そういう立派な駅になってほしいと思います。

どうもありがとうございます。